
桐生京介シリーズ

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桐生京介シリーズ

【Zコード】

Z5942M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

「日常とは何か。」

それは酷く曖昧で、とても定義が難しく一言で言葉に出来ないの
でござります。

サテサテ、そんなこんなで始まる非日常。

いえ、桐生君にとっての日常が幕を開けるのです。

日常と、非常、そんな境目にいる青年桐生京介が行く。普通の日常と人ならざる者と関わる非常。若干ホラーを交えて描くお話・。

• 予定

桐生京介の日常。 売項 始まりノ事

長い長いと思われた梅雨の時期にとうの昔に別れを告げ、嘘のようにお天道様はカラリと晴れ渡り
陽はジリジリ、蝉はミンミン啼くそんな夏の暑い日のことドジョウります。

帝都・四葉、和洋様々な服装の若者が闊歩する大通り。

一人の青年が汗一つかかず涼しい顔をして歩いております。

この彼、名を桐生京介と申しまして、ついこの間成人したばかりでございます。

容貌は細面、透けるような白い肌、色素の薄い髪。

人の良さそうな笑顔で愛嬌のある顔立ちをしておりました。

文字だけで見ると少々異国の風を感じさせ、こ洒落た雰囲気。

しかし実際はと言いますと、栄養の足りなそうな青白い表情に頼り無さそうな小柄細身のお姿。

色素の薄い髪が貧弱に拍車をかけまして、纏う袴は色あせて大きさは身の丈に合わず余り気味。

絵に描いたような何処にでも居る貧乏学生の一人にございます。

「日常とは何か。君は如何様に、定義するでしょうか？」

ぽつり、と呟いた小さなそれは、道行く大勢の話し声に紛れ。しかし、それは京介君一人の世界に響き渡り。

何の変哲の無い、京介君の背後に迫る影が歪んだのでござります。

「例え摩訶不思議な事が起こったとしても、それが続いてしまえば

口常に埋もれる。

口常とは全てを許容し飲み込む悪夢・・・

と、小生は思つのです。」

人波に逆らい立ち止まり、眉を寄せながら避ける人々を無視して。
感慨深げに空を見上げては、一人溜息をつく京介君。
憎たらしい位空は青くて雲一つ無い快晴。

影に問い合わせ、しかし影は問い合わせに答えず。
京介君は恨みがましい視線を背後の影にむけてちらり。
しかし影の方はと言いますと、ただ当然とばかりにその場に留まつただけにございました。

(ああ、何で何で・・・)

人間と言つものほこの口常に埋め尽くされていて平氣なのだらう。

)

「・・・・・」

続きの言葉を発そと、口を開いては口籠り

諦めたように肩を落とすと、再び雑踏の中に紛れ込みまして
その様子を面白がるかのように京介君の声ではない、クツクツと晒
い声がしたのでございました。

サテサテ、そんなこんなで始まる非口常。
いえ、京介君にとつての口常が幕を開けるのでござります。
果たして、それは喜劇なのか悲劇なのか。

判断するのは貴方しだいでござりまじゅう。

それでは、桐生京介の日常。

お送りしようぢやありませんか。

壹項 始まりノ事

口常。編　武頃　影嬢ノ事

サテサテ、今回お話しするのは、影嬢についてにじざいます。

その影嬢、本来ならば何の変哲の無く京介君の後ろをついて回る。“影”

ただし、それは自我を持つていなければ話でいります。

それは、いつのことだったでございましょうか

幾分、昔過ぎて京介君とて覚えていない事でして

昔の昔、とても言つておきましょう

遠い日の幼い京介君が一人蹲り、シクシクと泣きべそをかいている時でございました。

するとどこからか、奏てる様な、唄う様な、どこかよく聞いたことのある声が聞こえるではありませんか。

それはもう、飛び切り驚いては京介君

周りをキヨロキヨロ見渡しますが、周囲には人づ子一人見当たらず思わず首を傾げ、気のせいだつたのかと思つたのでござります。

『アラアラ、無視をするのかイ?』

それを、咎める様に響く声

慌てて探すも声の主は見つからず

しかし、よく耳を澄ませて、神経を研ぎ澄ませて探し当てたら、吃驚仰天

なんと、自分の影から声が聞こえるではありませんか。

「なつ・・・なつ・・・」

これは何とも驚いた

影の口に当たるあるいは部分が、声に合わせて腫んでいるのだけれど

します。

しかし、これだけでは飽き足らず

その声は京介君の声そのものであったのです。

吃驚、尻餅をつき声も出ない京介君の前に
その“影”は楽しそうに笑い声を上げるのでございました。

そんなこんなで、京介君

己の異質な“影”的存在に気づいたのでござります。

京介君の姿を映す“影”ですが、決して京介君と同じ存在ではございません。

己の自我を持ち、京介君とは別の生き物と言つても問題は無く
そんな“影”と共に存していくうちに、“影”は友になり信頼の置け
る者になります。

今となつては京介君になくてはならない存在にまでなつたのです。

います。

日々、京介君が成長すると共に、当然のようになつの“影”も成長す
るわけあります

昔は幼子の姿だった“影”も、京介君に合わせて成長し
姿を同じくしているのですが、これがますます

京介君はある日隠づくのです。

“影”は自分と同じ、男ではなかつたと

声変わり前の京介君

確かに、声だけ聞くならば、どちらかなどと判別が付き難いのでござります。

同じ声、と言いましてもその声はどこか柔らかく感じられ
話し方も女性らしさが出ているように感じるではございませんか。
姿だけは京介君と変わりこそ無いものの
他の物が、“影”は女性だと申しているのでございました。

そう、それに気づいたのは館花亜来嬢に会つた時の事なのでござりますが、

そのお話はまた後日にいたしましょう。

嗚呼、何て非現実

京介君が、これでは頭の可笑しな人では無いか
そう思われても仕方はございませんが
確かに“影”は存在したのでございます。

決して、他の人に見える聞こえる訳ではなく
他の人の前ではどんなに喋り散らしても、“影”はただの影なので

ございました。

しかし、京介君にとつては確かな存在
そして、深い深い縁で出会つた“人ならざる者”たちも“影”的存在を見る事ができ

その者たちからは、女性である事から“影嬢”といつ愛称で呼ばれ、

影嬢が確かに存在だと肯定するのを感じました。

ただ、貴方には見えぬだけ

貴方にとっては非現実でも、京介君にとっては現実の事でございました。

式項

影嬢ノ事

「小生は、摩訶不思議な事を望んでいるのでしょうか。」

一人呟く、京介君
その声を拾うものは周りには居らず、仕方無しに影嬢が拾つのでございました。

一人呟く、京介君

『アタシに言われても困るワ、京介』
「小生は日常が怖い、この生活が普通に感じるようになるのが怖い
最初は君の事も、この帝都の事も、歓迎すべき新しい出来事であつたはずなのに
今となつては、可笑しいかな、これもまた日常になつてしまつた
のサ」

しかし、それは言つても人は日々、止まる事無い時を過ぐしております。

それ故に慣れていく生き物でござります。

京介君はどうにもそれが気に食わない様子

『そつは言つても、今の生活が、アンタの日常じゃないのサ』

「・・・日常だと思いたくないんだよ。小生は」

京介君の生活は、人から見れば普通じゃござこません。
だからこそ、それをどうにも認めたくないと思つてしまつ心境で

『結局、アンタは日常を怖れてるンじゃ無い。』

「この生活を日常だと認める事で他の人との差が開いていくのが怖いのサ

帝都に出来たのだって、非日常を求めた為じやアない
ただ、人の多い“帝都”に紛れたかったンだ』

「そうなのだろ? カ・・・・・」

『そうサ、人ならざる者に囮まれて、アンタは人から遠くなる事を
怖れているの?』

「しかし、小生は君たちが嫌いなわけでは無いンだよ。」

『だから、アンタはワガママなのサ。

人の言つ“普通”を望んでいるくせに、どこかで“非現実”を逃
したくないのサ

どちらも、中途半端者。サッサと決めておしまい!』

影嬢は楽しそうにクツクツ笑いまして

それを受ける京介君は渋い顔をしたので『じゃこます。
もしも、彼女に顔があつたなら、ニタリといつ表現がピッタリでございましょう

意地悪く、京介君に突つかかつては一人楽しんでいるので『じゃこま
す。

「嗚呼、分つた、分つたよ

認めようぢやアないか。小生は、このまま人間離れしたくない。
しかし、人とは違う自分に優越感を感じている
どちらにも席を置き、どちらにも通じてみたい。

だからこそ、今が日常になつては困る・・・・・・・・・の
だ。』

そつ言う事を考へてゐる時点でもう人とは違つだらうと
影嬢は一人、声には出さず心の底でコソリと囁つたのでございました。

『変な問答で逃げようつても、アタシには無駄サ』

「・・・ああ、君には敵わないよ」

やれやれと、肩をすくめる京介君
長い間一緒に居る二人ですが、京介君は一度も影嬢に勝てた事が無いのでございました。

実はこの京介君、此処いらでは一番有名な四葉大学という所に通つ
学生であります

田舎から、わざわざ上京してきた一人にござります。

真面目に真面目

しつかり休む事無く通い続け、途中居眠りするで無し
影嬢に問うなどと如何様を働く訳でもございません
絵に描いた様な勤勉学生
かと言つて、頭が良い訳ではございませんが

そんな京介君、上京してからは幼馴染の家にござ
して
幼馴染とは申しましても年の離れているため兄妹の様な関係ではござ
ります。

ハテハテ、何故田舎から出て来たといふのに幼馴染がこの帝都・四
葉に居るのかと申しますと
ただ、その幼馴染の館花家

実家の爺様の調子が悪いと、懃々一家揃つて看病に来ておりまして
その実家が桐生家のお隣さんだと言つだけの話

年月にすると、四年ほどでございましょうか

京介君と館花家の付き合いは、そう長くはございませんが
なんせ、過疎化の進む田舎の村の事
たつた四年、されど四年

館花家の旦那様である晃久氏を第一の父に、奥様の壱子夫人を第二の母に

そしてご令嬢の亞来嬢を妹のように思つ」とに違和感は無いわけでも良くなさせて頂いていたので「ござります。

京介君、十から十三の時のことでござりました。

その後、館花家は四葉市に帰つて行つてしまつたものの
交流が途切れる訳でなく

そんなこんなで四葉市にある館花家のお屋敷に一部屋お借りする事が出来ているのでござります。

貧乏学生には実に有り難い環境

お家賃は、空き部屋だということで嬉しい事に家賃無しで住まわせて頂いて

食費諸々は納めておりますが、足りない分は手伝いで賄いまして
そして、極め付けに美味しい壱子夫人の手料理が毎日食べられるのでござります。

大学からも、さほど遠くなく

この京介君、他の貧乏学生からは想像も出来ないほどとても幸せな
環境に居るのでございました。

ただ一つ、問題なのは神社の神主である館花家

勿論の事、祀つて居る神様なんかが居る訳で

不可思議な影嬢がついて居る京介君、その神様に気に入られてしま
いまして

そのままずるずる芋蔓式に、否応無しに人ならざる者たちと交流が
出来てしまつたわけですが・・・

そのお話も、長くなるのでまた先の機会に縁があったりお話しする
ことにいたしまじょうか。

肆頂 京介ノ事

その日も暮れて、授業が終わりなかなか長い間拘束されまして、京介君の腰が少し悲鳴をあげた所でござります。

「よウ！京介、授業お疲れ」

「ああ、鈴也か・・・お疲れ様」

そんな京介君に声をかけたのは、背の高い青年
鈴也と呼ばれたこの彼、名を柏木鈴也と名乗つてはおりますが
実の所、柏木鈴と言ひづけの青年でござります。

サテ、この鈴也君びうして鈴と言ひづけ前なのかと言いますと
娘が欲しいと期待した両親が、先走つて付けたものとして
鈴を転がすような声の愛らしい娘に育つよう夢見ておりました。
生まれた時に変えればいいものの、何を思つたかそのまま名付けられてしまいまして
その可憐な響きとは真逆の青年でござります。

小柄な京介君が見上げるほど、背の高い美丈夫
二力つと笑つたその表情は男らしく
線の細い京介君とは違い、とても頼り甲斐のありそうな頼もしさが
ございまして

その性格も、サッパリと竹を割つたような性格をしており、より一層男前に磨きがかかるのでございました。

しかし、残念な事に名前は文物似合わないにも程があり、馬鹿にされ続けた幼少期意地で鈴ではなく、鈴也と名乗つていいの「いやこました。

「・・・鈴也、その癖は止めた方が良い」
「京介はいつもそれだな。」

ソウ、これは京介君が会つたびに鈴也君に言つ葉それを言つのはいつも急であります会話の途中、顔を合わせてすぐ、いつでも突飛に口に出す言葉「いやこます。

今回も、行き成りの話だしたので「いやこまして学校からの帰り道特に変わった所も無く、べからざい話をしている真っ最中

その話題を出す基準は何で出来てこるので「いやこましょうか。

「鈴也、見えないものから目を逸らしちゃア、いけないよ」

言われた鈴也君は、京介君の言葉が理解できず笑い飛ばす事しか出来ないので「いやこました。

「見えない振りはイケナイ。君は本当は見えているんだろ?」
「・・・」

どいつもする事も出来ずに頭をかく鈴也君
これを言っている時の京介君をどうにも受け入れる事が出来ないの
で「いやーこまして

(「これやえなけりや、良いんだけどな)

人からはよく、京介君と友達をやつていけるな等と言われている理由
この事を指しているので「いやーこましょ」
この京介君、己には理解できない、実に氣味の悪い言動を吐く事が
ざらに「いやーこまして

ただ、この“癖”を止めるといつも言動は、鈴也君にしか言わないの
で「いやーいますが・・・

その雰囲気故か、一度それを見たものは京介君に近づいてしまはしないので「いやーこまします。

そつこいつた面を踏まえた上で鈴也君は京介君とつるんでいるので「
ざーいますが

実の所、京介君には学校で友達が鈴也君しか居ないので「いやーこまし
た。

「ねー、早く気づかないよ、君、目を喰われてしまつよ」

太陽の光が雲で隠され

京介君の瞳が怪しく光つたように鈴也君は感じられ思わずブルリと身震いをしてしまったのでございました。

『クスクス、本当に、喰われちゃうわ』

影嬢の声は鈴也君には届かず

京介君の耳にだけに響きわたりまして・・・

カラリとした夏には似合わない、じつとりとした重い風が吹いたのでございました。

サテサテ、今日は以前お話いたしました影嬢と亜来嬢についてでござります。

館花亜来嬢

先にお話しました、京介君の幼馴染であり、館花家の「令嬢で」ござります。

“亜来”など、中々見ない名前ですが、彼女の父である晃久氏古き友人の名前を文字つて付けたんだとか、なんだとか年は数えて十四になつたばかりの、しつかり者のとても愛らしい娘にござります。

京介君とは年の差六つ

幼馴染よりは兄妹の方がしつくりと来る間柄

そんな二人が初めて出会つたのは京介君が十、亜来嬢が四つの時のことになります。

その当時から、影嬢・・・

いや、この時はまだ“影”でございましたか
影の存在を確かなものと捉えていた京介君
今でなら、開き直つている部分が多いものの
幼い当時は虚めを恐れ隠し通していたのでございました。

しかし、普段はそんな素振りは一切見せないものの、この時ばかりは別として

うつかり、亜来嬢がいるのにも関わらず、会話をしてしまつたのでござります。

『オヤ？亜来ちゃんが驚いている』

「えつ！」

先に気づいたのは、影。

いえ、本当は気づいていたのに京介君に教えずにいたので「じゃこま
して

実に意地の悪いお人でござります。

振り向いて、慌てふためる京介君

それを可笑しそうにケラケラ晒るのは影

そんな雰囲気を壊したのは、他でも無い亜来嬢の一言で

「兄様？その女の方……は何方ですか？」

「くつ！」

『おどろいた！亜来ちゃんには、ショウセイが見えていたみたいだ
ね』

影が見えている

京介君、その事実に驚きつつも、そこは神社の娘
まあ、見えていても可笑しくは無いと高速で頭を回転させ
しかし、驚くべき事はここにも一つ

「女の方…………って誰の事だい？」

「兄様とお話しているのは女の方ではありませんの？」

不思議そうに首を傾げる亜来嬢

そつ、この影を女性だと確かに言い切ったのでございました。

自分の“影”あるこの存在

京介君、ずっと影を同じ“男”だと思っていた訳でして
同じ声、同じ形、同じ喋り方・・・
そう、疑う事無く決め付けていたのでござります

『いやア、この子は凄いねエ京坊！“アタシ”が分るなんてサ』

いや、そんなはずは無い

そう思つた京介君の思いをバサリと切り捨てて、免とでも書つように
あつさりと口調を変え女性である事を肯定する影

付いて行けずには京介君、田を白黒白黒
間違つた事を言つたのかと、亞来嬢はオロオロ
楽しそうに笑う影はケラケラと

「影が女性だなんて・・・！」

手鞠が「ロロロロ、ロロロロ転がつて
京介君の言葉も「ロロロロ、ロロロロ転がつて

この時、“影”は“影嬢に”なつたのでございました。

陸項　　過去ノ事

そう、確かにあの時亞来嬢は影の事をの方だと言つたのでござります。

その時は、よくも分つたものだと感心した京介君
しかし、今、当時を思い返してみますと亞来嬢が影を女性だと決めた

が、正しいのでございました・・・

それは“言靈”亞来嬢の持つ力

女性だと京介君とは別の者と捉えた亞来嬢の言葉があつたからこそ

今の影嬢がいるわけでして

幼い京介君には気づく事が出来なかつたのでございました。

日常。編 漆項 田タノ事

こう見えて、京介君
影嬢の存在や、周りの交流関係のお蔭様で皆様には非日常に思える
生活をしておりますが
案外、それ以外は普通の日常生活を過ごしているのでござります。

それはと言つのも、前にも一度申しましたがこの京介君
“人間離れしたくない”と言う意思がそりゃあもう強くございまして
極力、普通の人と同じ生活をと心がけてはいるのでござります。

ただし、それが上手くいっていればの話と言つもので
そこはなんと言つても京介君
そう簡単に入々の生活に紛れられる訳でなく
大学では、一人浮く
親しき友人は鈴也君ただ一人
ご近所様では可笑しな人だと、ちょいと有名・・・
全く持つて京介君にしてみれば不本意で残念な結果なのでございました。

まあ、周りの目は置いておいて
京介君の一曰と言つのは他の人とほど変わりは無いのでござります。

朝は早くに目を覚まし

館花家のお手伝いに励む京介君

境内の掃除から、庭に水遣り、はたまた炊事のお手伝いまで

まあ、その日によつて変わるのでですが恩を返すとばかりに張り切り
多少の空回りをしつつも、精を出すのでございまして
すると朝食は壱子夫人の手料理が、普段以上にとても美味しく感じ
られるのでした。

そんなこんなで亞来嬢を学校に送り出し
京介君もいそいそと学校に向かうわけですが
その途中、影嬢にちよつかい出されたり、からかわれたり
あえて無視し、見ない振りにござります。

学校では至極真面目に授業を受けまして
真面目なだけで、全て理解出来るわけでもなく
頭を抱えながらも、意地で何とか付いていくのでございました。

一人寂しく京介君

何をするにも一人でございまして
花の無い虚しい学生生活を送つてゐるのです。

ソウソウ、友人である鈴也君は男女共から人気者
四六時中ご一緒しているわけではございません
哀しいかな

鈴也君とは学科が違い、受けける授業が被るのは氣休めにかする程度
とは言つても、鈴也君
有り難い事に京介君と居る時間がこれでも一番長いのではございま
すが。

そんなこんなで、授業も終わり
疲れながらの帰り道
懐と時間に余裕があるので、行きつけの甘味所で一休み
駄目なら、そそくさ家に帰りまして

勉学や手伝いに励むのでもございました。

ほうり、“普通の日常”でござるこましょ’う?
京介君とて、未だ人間なのでござります。

ただただ、ちょいとばかり危うい“普通の日常”と“可笑しな非日常”的に立っているだけです

そう、田常も非田常も紙一重

京介君に限らず、貴方もソウでござるこましょ’う。

ふとした瞬間、一步間違えればすぐに世界は移りつゝのでござります

貴方と違つて、京介君はどちらにも属さず、その境界線に立つて居るだけ

その違いだけにござります。

右に倒れるか左に倒れるかは今後の京介君次第でござりますが。
それを邪魔しようとする影がチラホラと・・・
見え隠れしては耽々と京介君の背に迫つているのでござりました。

京介君が恋するは、行きつけ甘味所の看板娘
優しく笑顔が可愛い娘に京介君
瞳は奪われ、心は持つて行かれ
それはもう、熱い視線を送っていたので・・・

と、まあ、言えれば良かったのですが
なんせこの京介君、恋だの愛だの未だ理解が出来ぬ感情で
惚れただ睡れただが一切分らず
日々過ぎ”じしてきたので”ござります。

“人間”と接する事があまり無いとは申しましても
いたとか、これは行き過ぎで
二十歳になつても浮いた話が一度も無いので”ございます。
亞来嬢は大切ではあります、至つてこれは家族愛
モテる柏木君と一緒に居る所為か
周りの娘は、眼中に無し、全て空振り、京介君を素通りするの”ございまして

柏木君にお熱気味

まアそれを京介君、気にした様子も”ございませんで
ど”じでも良”じと思つているのも、問題なので”ござりますが

オオつと、話がずれたでは”ございませんか
そう、今回お話しするのは甘味所の看板娘
名を湯元香澄と申しまして、年は数えて十八歳

看板娘と言つだけに、明るい笑顔の可愛らしい娘なのですが

ちよいとお転婆、そそつかしい

楚々とした亞来嬢のよつな『』令嬢とはいわせか違う種類の娘で『』ぞ

います。

しかし、その明るさや元気な所が中々の愛嬌が『』ぞいまして
界隈の男性群に人気有り

甘味所といった場所にも関わらず、男性客もチラホラ見えるので『』
ざいました。

実はこの香澄嬢、京介君を気味悪がる事無く接してくれる数少ない
女性で『』ぞいまして

柏木君や亞来嬢は“ こつち側 ” と認識している京介君
唯一の“ あつち側 ” ・・・

言わば “ 普通の人 ” の友人で『』ぞいました。

“ 普通の人 ” から見れば、どうにも気味が悪がられる京介君
何故、香澄嬢は平気なのかと申しますと
如何せん、この香澄嬢中々に鈍い鈍い・・・
例え、京介君が変な事を言い出しても理解が出来ないので『』ぞいま
して
少々抜けた娘で『』ぞいました。

サテサテ、どうしてこの香澄嬢と京介君が知り合えたのかと申します
すと
全て亞来嬢のお蔭で『』ぞいます。

年若いながらに大人びている亞来嬢と、年の割りに子供っぽい香澄嬢
年は離れているものの、これで仲の良い関係を築いているようでございまして

京介君はそのお零れに『』つたという訳で『』ぞいます。

まあ、実の所この亜来嬢、浮いた話の無い兄を心配し、交流を広げ
てあげようと考えたのでございました
姉が欲しいなどという思惑はございませんが
何て、出来た妹なのでしょうか

しかし、京介君にはサッパリと伝わっておらず
妹の心知らずとでも言いましょうか

全く持つて駄目な京介君なのでございました。

捌項 恋ノ事

「おい、京介君」

「はい、なんでしょう?」

場所は変わつて、館花神社

ちよいと、お掃除する手を止めて、竹箒片手に京介君
すっかり、その姿が板についているのでござります。

これで良いのか、四葉大生

本人に至つては、喜びそうな言葉ではございますが。

そんな彼に声をかけましたのは館花家御当主晃久氏
亞来嬢の父であり、この館花神社の神主でございまして
簡易ながらに狩衣衣装に身を包み

穏やか、と言ひ言葉が全身から滲み出でているようなお人でございま
す。

「いやあね、何もそこまで頑張らなくても良いんだけどな」

京介君の竹箒の先を指差し

その先には大量に集まつた芥やら葉やら

「小生は居候の身ですからねエ、これ位は当然ですよ

「・・・そつは言つてもねえ」

至極当然と胸を張つて答える京介君

予想外にも晃久氏、うつむ、と顎に手をあて考え込んでしまいました

「なつ、何か問題があつたでしょうか！」

「問題・・・問題かあ・・・・」

「！」

「ああ、いや、別に問題じやないっちゃア、問題無いんだけどね」

「一体どちらだ、と言いたくなる様なご様子の晃久氏
そんな様子に京介君

青くなつたりホツとしたり

傍から見ていて、面白い光景でございました。

「あらあら、この人は仕事が無くなつてしまつて急げてしまうのが
怖いのよ。」

そう、クスクスと笑いながら登場なさつたのは
奥様である壱子夫人

その立ち姿は凜としており、清楚な大和撫子の様なご婦人でござります。

「おい、壱子！」

「だつて、本当の事でございましょう？

京介サンにお仕事取られた気がして手持ち無沙汰にたつているのですよ。」

焦る、晃久氏を尻目に

この壱子夫人、亭主を立てる慎ましやかな女性ではございますが
例に漏れずこの夫婦、実際は壱子夫人が手綱を握っているようで
尻に敷かれるとまでは行きませんが、亭主関白とも行かないご様子

「でも、小生はこのくらいの雑用程度しかお手伝い出来ないんでありますて・・・」

「その雑用であるお掃除が、大好きなんですよ。この人は」「むっ、」

何を隠そう、このお方

綺麗好きと言いますか、大層掃除が好きな性分でございまして京介君が来てから大分経ち、ここまでよく我慢してきたと言う所だけなのではございますが

「ですから、仲良く一人でお掃除してくださいね。

はい、旦那様」

「むむむ、」

終始にこやかに微笑を浮かべながら壱子夫人持つてきていた竹箒を晃久氏に手渡すと
躊躇つ面の晃久氏と、ポカーンとしている京介君を放つて置いて何事も無かつたかのように去つていってくれました。

口常。編 拾項 夢見ノ事

夢、幻、空想、そしてまやかし
その一言で片付けてしまえれば、話はとても簡単でございまして
京介君にとつても、良かつた事にござりこましょつ。

されど、現実とはそう簡単にはいかず
しかと見て、いよいよ虚像を掴み本物は見えず
翻弄しては惑わし、難儀な物でござります。

あつちへ、ふらふら
じつひへ、ゆらゆら

何処へ行くのか、迷える蝶は
何処を目指すか、彷徨う影は

呼ぶ声は何処から聞こえるのか、
いや、呼んでいるのはこちらの方か
果たして呼ぶのは誰なのか
答えても良いモノ・・・なのかな

ぐるぐる、ぐるぐる、廻りに廻つて
言葉だけが過ぎ行くのでござります。

・・・お かげ ト

『京介サ ン』、『京 介 君』、『介 、

れよ つ い
く ナ ロッヂ あい
む お い !
に きょう すけ

・・・・・京坊つ !』

「へ、あ、嗚呼」

影嬢の呼び声に漸く反応を示す京介君
グラリと揺れる感覚に、嗚呼眩暈がなどと頭では悠長に渦つのドーン
ぞこまして
頭に反して体の方はといいますと、倒れまこと足を踏ん張り耐える
のドーンさせた。

『ヤレヤレ、京介は一体何をボケつとしてるんだか・・・』
「・・・少し、考え方をしていたんだよ。」

大きく息を吐き出しまして、しかと前を見据える桐生君
聞こえる音は普段と変わらぬ雑音で
耳を塞いでみても、聞こえる音は日常の雑音ドーンさせます。
しかし、よく耳を澄ましてみると、何処からとも無くジジッ、ジ
ジジと何かが聞こえる気がするではないせんか。
雑音に塗れて拾われる音は何か。
閉じる事の出来ない耳には聞かないといつ選択肢は無いのドーンさせ
まして

暑さの所為で無く流れ落ちる汗は何を意味するのか・・・
着実に、一步また一步と時は過ぎてこくのドーンさせた。

拾項　　夢見ノ事

影嬢の呼びかけに答え、現に戻つて来た京介君
果たして、他の声に答えていたのならば・・・
一体何処に戻つて行つたというのでございましょう

『それで、立ち位置は決めたのかしラ？』

深い深い夜の闇である筈のこの場所に
紛れていても、それは確かに存在しているのでござこまして
奏でるようになり、唄うように
その旋律を、響かせてこるのでござれました。

「小生は、小生は・・・」

『そんなに未練があるのかしリ、この生活に
いつだつてアンタは、『そつち』に恋してゐる』

闇は語る、その濃度をますますまして
闇は唄う、美しい歌声を空気に溶かして
そして、影が晒う、それはもう愉快そうに

『サシサヒ決めておしまー弐』

昼間ならば賑わう筈のこの通りも、この時間帯になると辺りには人
つ子一人見当たらず
傍に立つ瓦斯灯がゆらゆら、ゆらりと
夜遅くと言つた闇の迫る時間帯では無いにも関わらず
その小さな灯りは俯いた京介君の表情を照らすことは無いのでござれ
います。

『ねエ、京介。こつまでもこのままじや逆にお前が壊れる』

俯いた京介君、その顔には苦笑の色がござつて
薄い唇を噛み締めていたのでござつました。

『迷うのは構わないサ。だけどね、時はまつちやくれないワ。』

からかう様な色は一切存在せず

普段とは違つ音色のその言葉には真剣さがござつました。

しかしその言葉に答える声は無く
ジリリと瓦斯灯の燃える音だけが微かに鳴るだけでござつます。

ゆらりゅらり、ゆらりゅらり
それは瓦斯灯の灯りの音でござつましょつか。

ゆらり、ゆらり

それとも、暗闇が灯りを飲み込む音でござつましょつか。

背後に迫るものとは一体・・・

本来ならば、有り得ない静寂が広がつていきました
閉ざされてしまつたかのよつて、京介君の耳には何も届く事がなか
つたのです。

そして何かを振り払つように早足に、京介君は振り向くもせずその
場から立ち去るのでござつました。

聞こえない、聞こないと

後に後悔するのは京介君で、『やりますのに・・・

一体、影嬢の言葉はどれだけ京介君に届いているのやら
無意識に塞いだ耳には、何も届く事が出来ないので『やります。

サテサテ、お楽しみいただけましたで「やれこましょつか。

京介君の“日常”

いえ、“非日常”的方で「やれこましょつか。

判断は、貴方にお任せする所存に「やれこます。

オヤ？ 本当にただ京介君の日常につづいて語つただけでは無いか · · ·
と疑問にお思いで「やれこましょつか。

やうでしょつか、 そつでしょつか。

まあ、このお話が始まりに過ぎなことこのう事で「やれこまして
盛つ上がるお話のやわつけこの先と並つても過言では「やれこません。

鈴也君が田を逸らせているモノとは

亞来嬢の“言靈”の力とは

人ならざる者との関係とは

この先の京介君の立ち位置とは

京介君の背後に迫つてこるもの · · · とは

ちょっと、もつたいくらいに聞かせなさこと「希望で「やれこますか。

オヤオヤ、せつかちなお方も居たものだ。

残念、無念

意地悪してゐんじやア「やれこません。

私の方も、語りたくて仕方が無いの「やれこますよ。

実はもう、幕閉めの頃合に「やれこます。

早く帰らないと、闇が挙つて襲つてくるやもしだせん。

なんたつて、彼らはお田様に関係なくビリードも潜んでこゐるのやうございまして

虎視眈々と貴方の背後から・・・

おおつと、驚かせましたでしょつか。

あまり長い間ここに居られると、ここから出れなくなつてしまつか
も知れないのじよがこます。

この話、決して嘘ではございません。
ですから、やつとお家に帰りましょつか。
決して、帰り道振り返つてはいけませんよ。
もし、振り返つてしまつたら、この場所に引きづり込まれてしまつ
やも・・・

一度と、ここから出られなくなるなんて事は嫌でござりますつか。

大丈夫でござります。

貴方が続きを望んでくださるのならば、私は必ずまた貴方の御前に
現れましょつか。

約束でござりますよ?..

サテサテ、“また”の機会がございましたら是非にお話を聞いていた
だければ幸いにござります。

お送りしましたのは語り手、麻生柚葉でござりました。

口常。編 拾武項 終わりノ事 · · 完 (後書き)

口常。編完結です。次からは縁合。編が始まるはず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942m/>

桐生京介シリーズ

2010年10月25日23時02分発行